

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 23 日現在

機関番号：32652

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2010～2014

課題番号：22720165

研究課題名(和文) 統語部門と音韻部門のインターフェイスから見る言語の随意性に関する研究

研究課題名(英文) Optionality at the interface between syntax and phonology

研究代表者

塩原 佳世乃 (SHIOBARA, Kayono)

東京女子大学・現代教養学部・准教授

研究者番号：30406558

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 856,810円

研究成果の概要(和文)：本研究はこれまで随意性が指摘されてきた言語現象を、特に音韻論的な重さ(強勢、イントネーション句や韻律語の数)の観点から分析し、語順の選択において真の随意性は存在しないという仮説の妥当性を検証してきた。平成23年度までは英語の前置詞残留を伴う移動・削除(swiping)と、日英語の動詞句内イディオムを中心にその音韻特性を分析し、平成25年度以降は日英語の Interwoven Dependency Constructions に注目し、重い要素が文端に移動し、それが文処理を容易にする効果があることを主張した。(平成23年～24年度にかけて、一年間の研究中断あり。)

研究成果の概要(英文)： This research dealt with the alleged "optionality" in various linguistic phenomena and approached the issue of optionality from the perspective of prosodic weight (such as prosodic prominence and the number of intonational phrases or prosodic words). The research has tested the adequacy of the hypothesis that no optionality exists in the choice of word order, based on the close examination of swiping in English, VP-internal idiom in English and Japanese, and Interwoven Dependency Constructions in English and Japanese. The conclusion reached is that the alleged optionality in the choice of word order is only apparent and one order is preferred over the other(s) for the ease of sentence processing, namely in terms of the edge-weight, at the right edge in English and at the left edge in Japanese. (The research was suspended for one year in 2011-2012.)

研究分野：言語学

キーワード：言語学 統語論 音韻論 インターフェイス 随意性

1. 研究開始当初の背景

研究代表者の平成 21 年度までの研究では主に動詞句内語順転換を扱い、日英両語における語順の決定は、それぞれの言語の一般的な音に関する特性と、統語 音韻部門のインターフェイスの在りように帰することができることを示した。

原理と媒介変数のアプローチの枠組み内での先行研究では、英語の V-PP-NP 語順は NP に随意的な右方転移が適用されて派生されるという分析が主流であり(Rochemont and Culicover1990)、日本語の NP-PP-V 語順は NP に随意的な左方かき混ぜ操作が適用されて派生されるという分析が主流であった(Saito1985)。それぞれの文の音韻特性に注目すると、英語では V-NP-PP 語順文が全体で 1 つのイントネーション句(IntP)に対応するのに対し、V-PP-NP 語順文では NP が独立の IntP をなすのに十分な重さがあるべきことが指摘されており(Rochemont and Culicover1990, Zubizarreta1998)、研究代表者の博士論文(Shiobara2004)に至る一連の研究もこれを確認している。一方日本語ではこのような重さに関する制限は明らかでなく、研究代表者は、博士論文での研究において日本語では PP-NP-V 語順と NP-PP-V 語順が同じ音韻特性を示すことを確認している。その上で日本語の文焦点の位置が文強勢の位置、特に動詞の直前の位置と一致することを指摘し、日本語の動詞句内語順転換も英語と同様音韻上の要請に従っているとして、両言語の差異が一般的な音韻上の特性、即ち英語が動的な強勢基盤で日本語がピッチアクセント基盤であることから導かれることを主張した。さらにその後の研究(e.g. Shiobara2006)において、音韻、統語、そして両者のインターフェイスに係わる制約が、通言語的に動詞句内語順転換を律していることを示した。

このように、Ross(1967)以降しばしば随意的とみなされてきた英語と日本語の動詞句

内語順転換は完全に随意的ではなく、インターフェイスの要請、特に音声形式(PF)に関わる部分(英語では「音韻的重さ」、日本語では「文強勢」の位置)の要請をうけた現象とみなすことができる。原理と媒介変数のアプローチから発展した極小主義は、言語機能の内容がどれだけインターフェイス制約あるいは一般的な認知機能に関わる制約から導き出せるかを探るプログラムであり(Chomsky1995)、さらにその後の提案では、言語特有の運用体系の存在を否定して言語機能は言語能力のみから構成されているという作業仮説を採用している(Chomsky2000:90)。研究代表者の一連の研究は、極小主義の方向性を支持し、言語機能と一般認知体系のインターフェイスの研究、より具体的には統語部門と音韻部門の相互関係に関する研究の発展をうながすものである。

本研究ではこれまでの研究から得られた知見、特に語順の選択において真の随意性は存在しないという仮説の妥当性を検証すべく、扱う言語現象を語順転換のみならず、語順一般、削除を伴う移動現象に広げることとした。語順の中では、特に英語と日本語の動詞句イディオムの語順制限を比較し、例えば Richards(2001)の英語イディオム、Kishimoto(2008)の日本語イディオムの統語的な分析に対して、統語 - 音韻のインターフェイスの観点からの分析を試みる。その際特に両言語の文強勢の位置と、イントネーションパターンの違いに注目し、さらに削除を伴う移動、特に *sluicing*, *swiping* のようにそれぞれ前置詞随伴、残留を伴う場合の随意性についても、特に前置詞の音韻特性に注目しながら Merchant(2002)に基づき Shiobara(2009)での議論を展開させて、統語 音韻のインターフェイスの観点からの分析を深めることとした。
[参考文献]

Chomsky, N. 1995. *The Minimalist Program*.

- Cambridge, MA: MIT Press.
- Chomsky, N. 2000. "Minimalist inquiries," *Step by Step*, ed. by R. Martin et al, 89-155. Cambridge, MA: MIT Press.
- Kishimoto, H. 2008. "Ditransitive idioms and argument structure," *JEAL* 17: 141-179.
- Merchant, J. 2002. "Swiping in Germanic," *Studies in Comparative Germanic Syntax*, ed. by C.J.-W. Zwart and W. Abraham, 295-321. Amsterdam: John Benjamins.
- Richards, N. 2001. "An idiomatic argument for lexical decomposition," *LI* 32-1: 183-192.
- Rochemont, M. and P.W.Culicover 1990. *English Focus Constructions and the Theory of Grammar*. Cambridge: CUP.
- Ross, J.R. 1967. *Constraints on Variables in Syntax*. Doctoral thesis, MIT.
- Saito, M. 1985. *Some Asymmetries in Japanese and their Theoretical Implications*. Doctoral thesis, MIT.
- Shiobara, K. 2004. *Linearization: A Derivational Approach to the Syntax-Prosody Interface*. Doctoral thesis, University of British Columbia.
- Shiobara, K. 2006. "On 'XP' in Heavy XP Shift," *Journal of Bunkyo Gakuin University, Department of Foreign Studies, and Bunkyo Gakuin College*, 5: 41-49.
- Shiobara, K. 2009. "An Interface Approach to Stranded Prepositions: A Case of Swiping," *NELS* 33: 705-716.
- Zubizarreta, M.-L. 1998. *Prosody, Focus, and Word Order*. Cambridge, MA: MIT Press.

2 . 研究の目的

本研究はこれまでに「随意性」が指摘されてきた言語現象（動詞句内語順、前置詞残留・随伴を伴う移動・削除など）を、特に音韻論的な重さ（強勢、イントネーション句や韻律語の数）の観点から分析し、語順の選択において真の随意性は存在しないという仮

説の妥当性を検証する。これにより、今まで生成文法理論に基づく統語論や最適性理論等で、それぞれ素性の導入や制約の並べ替えのメカニズム等により許容されてきた複数の可能な語順が、統語部門と音韻部門のインターフェイスの観点からは真に同一ではないことを示し、さらには、語順の随意性の研究が最終的には人間の脳内の言語機能全体の在りようの解明に貢献することを目指す。

3 . 研究の方法

本研究では、研究期間の前半 2 ~ 3 年において動詞句イディオムの語順制限、前置詞残留・随伴を伴う移動・削除現象の統語的音韻的特徴を、日英語を中心に詳細に分析し、その結果をゲルマン諸語にて検証することを試みた。分析は先行文献の読み込み、特に今までに扱われている資料の批判的な吟味に基づく信憑性を見直しを出発点とし、その上で十分でない資料を見極め、新たな資料を収集した。後半 3 ~ 5 年では分析結果を考察し、語順の選択において真の随意性は存在しないという仮説の妥当性を検証し、分析結果の理論的位置づけを整理した。その際、統語音韻のインターフェイスの観点から語順を研究している国内外の研究者、特に実際に音声実験を行っている研究者たちとの交流を持ち、学会や研究会でのワークショップや論文発表などを通じて意見交換し、フィードバックを得た。

4 . 研究成果

まず日本語と英語の動詞句イディオムを中心とした語順に係る制限について資料の見直しを行い、その結果を 2 学会 (FAJL5, 日本英語学会第 28 回大会) で発表した。具体的には、日本語と英語の動詞句イディオムのピッチやイントネーションを見てその音韻特性を分析した。その結果「動詞句イディオムは、韻律上の卓立を含み、最小の韻律句内

になければならない」という仮説を立てて、先行分析の問題点を解決する方向性を示すことができた。これは、これまで主に統語的な説明を与えられてきた日本語と英語の動詞句内イディオムを音韻・韻律の観点から再分析したもので、研究課題である「統語部門と音韻部門のインターフェイスから見る言語の随意性に関する研究」に直接的な係わりを持つ。

1年間の育休による研究中断の後、中断による遅れを取り戻すべく、大著 Scheer (2011) *A Guide to Morphosyntax-Phonology Interface Theories* を読みこんで Review を執筆し、近年の形態統語と音韻のインターフェイスに関わる理論的・経験的問題点を整理した。

その後、研究の対象とする言語現象を英語の Interwoven Dependency Constructions (IDCs) とそれに対応する日本語の構文に広げ、その随意性に注目して統語と音韻のインターフェイスの観点から分析した。その後現在に至る研究の過程で、IDC を含む文の容認可能性には、これまでに指摘されていないような個人差が存在することが明らかになってきており、それについても統語と音韻のインターフェイスの観点からの分析、説明を試みている。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計5件)

Articles

1. Shiobara, Kayono. 2015. "Toward a Unified Explanation of Multiple Dependencies," *JELS 32: Papers from the 32nd Conference of the English Linguistics Society of Japan*, 119-124. (refereed)
2. Shiobara, Kayono. 2012. "A Prosodic Approach to Ditransitive Idioms," *MIT Working Papers in Linguistics 64*:

Proceedings of the Fifth Formal Approaches to Japanese Linguistics Conference, ed. by Matthew A. Tucker, Anie Thompson, Oliver Northrup, and Ryan Bennett, 241-249. (refereed)

3. Shiobara, Kayono. 2011. "Significance of linear information in prosodically constrained syntax," *English Linguistics 28-2*: 258-277. (refereed)

Reviews

1. Shiobara, Kayono. 2013. "(Review of *A Guide to Morphosyntax-Phonology Interface Theories* by Tobias Scheer," *English Linguistics 30-2*: 718-728. (refereed)
2. Shiobara, Kayono. 2011. "(Review of *The Sound Patterns of Syntax* by Nomi Erteschik-Shir and Lisa Rochman (eds.)," *Studies in English Literature 88*: 216-222. (refereed)

〔学会発表〕(計4件)

1. Shiobara, Kayono. 2015. "A Phonological Approach to Interwoven Dependency Constructions," (Poster), the 8th Spring Forum of English Linguistics Society of Japan, 19 April, Seikei University (Tokyo, Japan).
2. 塩原佳世乃. 2014. "複数の依存関係を含む文の統一的説明にむけて (Toward a Unified Explanation of Multiple Dependencies)," 日本英語学会第32回大会、11月19日、学習院大学(東京都豊島区).
3. 塩原佳世乃. 2010. "音から見る統語と線的情報の有用性" 日本英語学会第28回大会、11月13日、日本大学文理学部(東京都世田谷区).
4. Shiobara, Kayono. 2010. "A Prosodic Approach to Ditransitive Idioms,"

(Poster), Formal Approach to Japanese
Linguistics (FAJL) 5, 7 May,
University of California, Santa Cruz,
U.S.

6 . 研究組織

(1)研究代表者

塩原 佳世乃 (SHIOBARA, Kayono)

東京女子大学・現代教養学部・准教授

研究者番号：30406558